

まち巡り こむ巡り

第5部
北星
かいわい

「早く食べたいな」「今日はお菓子つきでラッキー」。北星公民館(北門町8)で11月22日、ハンバーグやフライドポテトが入った弁当を手にした子どもたちが喜びの声を上げた。月1回の「北門子ども食堂」だ。毎回30〜40人の子どもが訪れるが、新型コロナウイルスの影響で、6月以降は食卓を囲む形から弁当配布に切り替えている。

初の子ども食堂

さまざまな事情で欠食する子どもと「手作りの温かい食事や楽しい時間を共有し、おなかも心も満たしてほしい」。北門子ども食堂はそんな思いから、公民館隣の北門児童センター館長、青塚美幸さん(45)や、現在は「旭川おとな食堂」代表の岡本千晴さん(47)らが2015年11月に始めた。子ども食堂としては道内で初めてだった。「食事だけでなく、年の近いお兄ちゃんお姉ちゃんと遊べるのも大きい」と青塚さん。料理をしたい子どもと一緒に卵焼きやホウレンソウのごまあえを作ることもあった。



人ほどのボランティアだ。みんな子どもが大好きで、この日は入りの高校生が訪れていた。食堂では毎月1回、周年イベントを開く。クイズやビンゴゲームを楽しむが、今年は周年という節目なのに、新型コロナウイルスで開けなかった。代わりに用意したのが「5」の形をしたクッキー。住民が用意した手作りケーキやチョコレートもあった。

旭川歴星高2年の紙谷和希さん

多世代交流「北の星」育てる

⑤ 食事も勉強も

(16)は、メニューを書く黒板を、仲間と「5周年」のにぎやかな文字で飾り、「プレゼントだよ」と膝を曲げて目線を合わせながら、子どもたちにケーキやチョコを手渡した。「渡した時、笑顔になっ

てくれるとうれしい」。紙谷さんも笑顔をもらってる。「この解き方で合ってるかな」「大丈夫だよ。毎週土曜の夜、講師は道教大生



5周年のクッキーが付いた弁当を渡す北門子ども食堂の高校生ら(西野正史撮影)

北星地区センター(旭町2の8)で10人ほどの小中高生に勉強を教

えてきたのは、道教大旭川校(北門町9)の学習支援サークル「ゆずりは」の12人だ。新型コロナウイルスの影響で春から休み、いったん再開したものの11月半ばから再び休止しているが、勉強が行われていた日は毎回4人ほどの学生が参加。即興で算数などの問題を作ることもあった。「質問したい所をポイントで聞けるのがいい」。通っていた1人が教えてくれた。来新春から中学校の教員になる4年の柴田康介さん(19)は「ここが分かっていないかを踏まえた上



旭川北ロータリークラブの会員と、せんちゃん勉強会について話す土田さん(中央)

で教える。教育大生といっても教育実習の機会は限られるので、子どもと関われる経験は大きい。ゆずりはの学生は「せんちゃん勉強会」にも協力している。ラーメン店「せんちゃん」(大町1の3)で月2回開かれる。旭川北ロータリークラブが18年3月に始め、高校生や地域住民も講師を務める。勉強の後は、せんちゃん特製のしょうらーめんをみんなで食べ、将来の夢や学校生活について語り合う。新型コロナウイルスで中止になるまでは、小中学生15人ほどが来ていた。

「おいしそうに食べたたり楽しく会話したりする子どもたちの笑顔を見守るのが楽しみ。再開したら、腕によりをかけておいしいものを振る舞いたい」と店主の千田健雄さん(75)。

「ただ勉強を教えるだけじゃなく、多世代が交流を楽しく。いろんな人に出会って見聞を広めてほしい。だって子どもは地域を背負って立つ存在だから」。ロータリークラブ会長の土田晃さん(63)が力を込めた。住民の思いと若い力を重ね合わせて、未来を担う「北の星」を育む取り組みが、まぶしく見えた。

(第5部は折田智之が担当しました)